

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

学位論文は、中華人民共和国建国（以後、中国と表記する）を起点とした小学校における写字書法教育史の構築を企図した研究であり、併せて日本の書写書道教育の教育課程や検定済教科書と比較教を行い、今後の書写書道教育の方向性を遠望することを目的とした論考である。学位論文は、日中において研究が十分になされてこなかった中国の小学校における写字書法教育関連の教育法規の記述の変遷を分析し、その変化を社会的な背景から捉え直した独創的な論考となっている。中国においても当該分野の研究は断片的なものに止まっており、学位論文が中国写字書法教育史を体系的に構築した唯一の研究である点を指摘でき、その意義は極めて大きい。また、中国における写字書法教育の教員養成の動向、日本の教育課程や検定済教科書との比較研究は、これからの日本の書写書道教育を考えていく上でも示唆に富んでいる。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

提出論文では、中華人民共和国建国を起点とし、建国期、1950年代半ば～1960年代、文化大革命後～1980年代、1990年代～現代に分期し、教育法規を中心とした目標を整理・分析し、社会的背景を踏まえながら中国の写字書法教育の性質を明らかにしている。論文の前半では、各時代の教育法規の丹念な翻訳と分析、文字改革運動や識字教育等の社会情勢からの照射を行い、その研究手法は緻密かつ体系的である。論文の後半では、中国の写字書法教育の検定教科書11種の内容構成や特徴の整理と詳細な分析を行い、日本の書写教科書と比較研究を展開している。さらに、中国の教員免許状にあたる「教師資格証」に視点をあて、現地でのインタビュー調査を通して、写字書法教育を担当する教員養成の動向と考察を行っている。以上の通り、提出論文の研究手法は、中国の写字書法教育の歴史と全体像を明らかにする研究として、当該研究分野の研究手法として妥当性があると判断できる。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

提出論文の中心は、中国の建国期から文化大革命を経て現在に至るまでの通史的研究であり、資料の収集において困難な時期が指摘される。しかしながら、提出論文においては、可能な限りの写字書法教育関連の教育法規を収集して整理し、膨大な資料を丹念に翻訳したうえで、当時の社会情勢などとの関わりから分析を試みている。また、11社から発行されている検定済教科書「書法練習指導」について、教育課程上の位置づけとその発行の経緯を踏まえながら、内容や構成の視点から精細に分析し、その特質を明らかにしている。さらに、写字書法教育を担当する教員の養成について考察するとともに、中国版キーコンピテンシーである「核心素養」と書法教育の関係性について分析し、その結果をもとに日本の書写書道教育の今後を遠望している。以上のように、資料の研究収集の収集・分析については適切であると判断できる。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

提出論文は、中国建国期から今日に至るまでの写字書法教育の歴史を構築し、網羅的かつ唯一の通史と位置づけられ、今後の研究を進展させる上での土台となる論考である。中国の写字書法教育を徹底的な法令の分析から検討し、伝統文化教育や核心素養の視点からその実相を明確にした考察と結論は妥当であると判断できる。

また、文字改革運動や識字教育等の社会情勢から考察し、その位置付けを明確にした点も評価できる。中国の写字書法教育の教育課程は、多くの点で日本との共通性が指摘できるとともに、書法を中国文化の最たるものと捉えた文化教育であるという独自性を有している点を指摘している。同じ漢字文化圏に属する中国の写字書法教育の本質と歴史的展開を捉え、文字文化教育の視点から捉え直すことは、今後の日本の書写書道教育を遠望するに当たり重要な視座を提供していると考えられる。以上の点から、提出論文は学術的な水準に十分に達していると判断できる。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

これまで、中国の写字書法教育史については、断片的な学術論文にと止まり、通史として位置づけられる研究は日本・中国を通して存在しない。中国の写字書法教育史の変遷に影響を与えた社会背景を明らかにすることで、今日の書写・書道教育という現行の教育課程が定着していった淵源と実相、成立過程を明確にした研究はこれまでになく、大きな成果を有している。

近年、中国では自国文化の発揚と継承・発展のため、小中学校で書法教育が充実する方向性にあり、大学においても多くの書法専攻が設置されている。近年の情報機器の普及により、一般社会において、手書きの減少が指摘されているが、小学校の現場では、漢字習得や様々な活動の場面で手書きによる学習が行われている。提出論文は、中国の建国期から現在に至る写字書法教育史の展開を多角的な視点から照射しており、その成果は、今後の書写・書道教育の展望を検討する上でも意義があり、取得学位にふさわしい十分な成果をあげていると判断できる。

以上の通り、令和4年1月31日にオンラインにより開催された公開論文発表会後の審査委員会において、申請者の提出論文は、審査員五名の合議により、本研究科の博士（教育学）の学位を授与するにふさわしいことを判断した。